

耳慣れない『ピレネー』(南欧)

の紀行文

岩田越夫著「ピレネーが見えてきた」を拝読

2013. 25. 2. 13

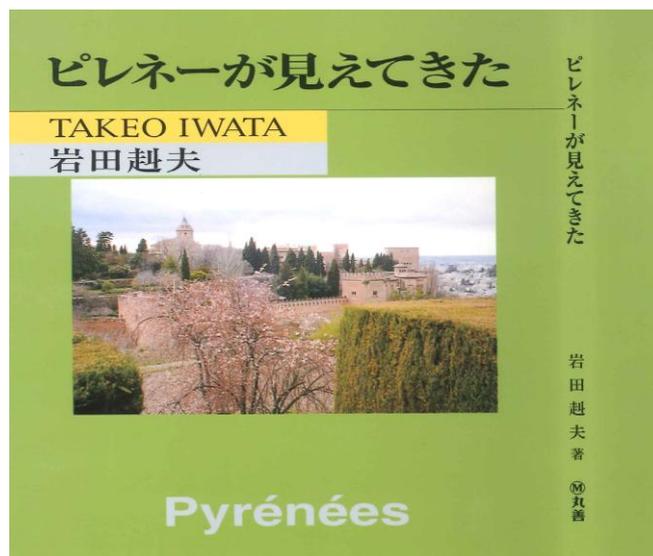
歴史愛好家仲間「四御神（しのごぜ）界限探訪」を、早春の凜とした冷い空気が残る東岡山駅に集合。出発前の談笑の中で、こっそり渡された冊子には「謹書」の葉が入っていた。ご本人の著作のようだ。岩田越夫氏夫妻が仲間とスペインを私的に旅された紀行中のメモを、エッセイ風に纏められた冊子である。

公務の合間に息子さんが滞在したことのある、南欧スペインを、気楽な旅行光景が軽いタッチで浮かび上がってくる。彼の人間力を通して異国の食文化や身近な生活。普段接しきれない絵画や自然を、我々は間接的に体験させていただく。30通の短いエッセイに、ご本人が撮られた写真も程よく配置され本の体裁もしっかりしている。

岩田夫妻との交流は、奥さんがご主人の激務の合間にと誘われて参加された、高梁方面の文化を探るバス旅行で知り合った。家族が先行して故郷の岡山に帰り家を建て、主人は都会での単身勤務と短い紹介の後で会話は弾んだ。その後息子さんの英国での地道な活躍が日本のTVに紹介されるとの、遠慮がちなながらも嬉しそうな連絡を戴き、家族で拝見したこともある。「今はお金にならない仕事」に生きる方向を見定めた息子への慈愛の気持ちに接し嬉しかった。

彼も長い勤めも終り、歴史系の各種の活動にお互いに接してきた。彼の企画するグループも仲間から頼りにされ盛況のようだ。最近婦人の姿は見えないが、会話の中で元気で活躍の様子も覗える。仲の良い夫婦なのだ。氏のこの小

冊子に接し、本人は語学を磨き視野を地球の隅々に広げる好奇心は、第二の人生のスタートに遭って彼の生き方に感動した。一読をお薦めできる冊子である。



岩田越夫さんの冊子